

第59号

● 目次 ●

巻頭言：韓国地質学会を訪問して	1
最近の研究会・シンポジウム等	2-5
東北大学片平まつり 2013 の開催	2
講演会 地球深部探査船「ちきゅう」が解き明かす東北沖地震の謎	3
講演会 中国の大気汚染問題と日中協力	3
日本地質学会（東北アジア研究センター共催）の開催（9月14～16日）について	4
日露ワークショップ 日本文化を教える：ロシアと日本の日本語教育の現場から（9月25日）	4
日本研究の国際化を目指す～ハイデルベルク大学「古文書ワークショップ」～	5
学問を通じた地域連携「講座：地域の歴史を学ぶ◎鬼首」の開催	5
表彰	6
著書紹介	6
新任紹介	7
活動風景	8
編集後記	8

巻頭言

韓国地質学会を訪問して

 東北アジア研究センター副センター長
 石渡 明

私が会長を務めている日本地質学会（会員数約4,000人）は2007年から大韓地質学会と学术交流協定を結んでいる。この協定に基づき、10月22日～25日に私と副会長のSimon Wallis氏（名古屋大学）が済州島で開催された大韓地質学会と関連学会の連合学術大会を公式訪問した。ここではこの訪問の概略と感想を述べて巻頭言とする。

日本地質学会の学術大会は地質関連学科を有する大学の回り持ちで毎年開催しており、今年は9月に本学の川内キャンパスで開催されたが（本号4ページ参照）、韓国の大会は2年ごとに済州島のリゾートホテルで行い、その間の年は本土の都市の大学またはコンベンション施設で行っているそうである。同じ地質学会といっても、企業や公団の強力な経済的バックアップがある韓国の学会と、主に個人会員の会費で運営している日本の学会では、かなり様子が異なると感じた。

大韓地質学会の兪剛民（Yu, Kang Min）会長は京都大学出身、日本の旧地質調査所（現在は産総研地質調査総合センター）に相当するKIGAM（韓国地質資源研究院）の金奎漢（Kim, Kyu Han）院長は名古屋大学出身で、お二人とも日本語は完璧である。一方、最近では韓国の大学や研究所で働く日本人研究者も複数おり、韓国の大学で博士号を取った日本人学生が日本の研究機関に就職した例もある（彼は



大韓地質学会（関連学会との連合大会）のプログラムの表紙。航空写真は会場があるフェニクス・アイランド。その右後方に城山（ソンサン）火山がある。

韓国語が話せる）。これらは日本と韓国の地質関係者の非常に深いレベルの相互交流を象徴している。両学会は、これまで共同ワークショップや合同巡検を行い、学生を含めた相互交流を活発に行ってきた。そして今夏には私も委員を務めるIODP（統合国際深海掘削計画）の一環として、東アジア地域の長期的な気候変動の解明をめざし、米国の深海掘削船ジョイデス・レゾリューションが日本海の多数の地点で海底堆積物の科学掘削を行い、韓国領海内でも1カ所の掘削を行った。この航海の研究主任は日本人と米国人だが、韓国の研究者も複数乗船しており、今回の済州島の学会では、その成果を発表する国際シンポジウムも行われた。

韓国語が話せる）。これらは日本と韓国の地質関係者の非常に深いレベルの相互交流を象徴している。両学会は、これまで共同ワークショップや合同巡検を行い、学生を含めた相互交流を活発に行ってきた。そして今夏には私も委員を務めるIODP（統合国際深海掘削計画）の一環として、東アジア地域の長期的な気候変動の解明をめざし、米国の深海掘削船ジョイデス・レゾリューションが日本海の多数の地点で海底堆積物の科学掘削を行い、韓国領海内でも1カ所の掘削を行った。この航海の研究主任は日本人と米国人だが、韓国の研究者も複数乗船しており、今回の済州島の学会では、その成果を発表する国際シンポジウムも行われた。

なお、大韓地質学会総会で行った私のあいさつは英語だったが、冒頭部分だけは当センターの金賢貞助教に特訓していただいた韓国語で行い、好評だった。金助教に感謝する。当センターの地球化学分野は最近モンゴルやロシアとの交流が盛んであるが、以前は中朝国境の白頭山の研究を行っていた。今回の私たちの訪問が、今後の韓国と日本の地質学分野の学术交流のさらなる発展につながっていくことを期待するとともに、当センターにとっても新しい交流のきっかけになればよいと思う。



最近の研究会・シンポジウム等

1
**東北大学
 片平まつり 2013
 の開催**



特別企画講演会「水と大気」会場の様子

10月12日、13日の両日、東北大学片平まつり2013が開催された。片平まつりは、その名の通り、片平キャンパスを主会場として、本学の研究所（金属材料研究所、多元物質研究所、電気通信研究所、流体科学研究所、加齢医学研究所、災害科学国際研究所）及び原子分子材料科学高等研究機構、東北大学史料館、それに東北アジア研究センターが一年おきに仙台市民に対して本学の研究所・センターの研究活動を紹介するために開催しているものである。本年の全体テーマは「きて みて ふれて!科学の力」。金属材料研究所が「おっ!



佐藤研究室のレーザ展示

マテリアルっておもしろい?!」、加齢医学研究所は「スマート・エイジング 健やかに育ち、賢く老いる」、流体科学研究所が「すごいよ!これぜんぶ、ながれの科学?!」、電気通信研究所が「コミュニケーションの未来を見に行こう!!」、多元物質科学研究所が「ふしぎ、おどろ

き、おもしろ科学」、災害科学国際研究所が「災害に負けない!人間のチカラ!」、原子分子材料科学高等研究機構が「ナノツアーズ 原子・分子の世界へようこそ」、東北大学史料館が「タイムマシンに乗って見ない?—アインシュタインにも会えるよ—」をテーマとし、いずれも市民に日頃の研究成果をわかりやすく紹介することを目的とした展示を行った。東北アジア研究センターのテーマは「東北アジア 人の営み 母なる大地」。今回は、生命科学プロジェクト総合研究棟1階ホールを会場として、本センターの文系・理系の五研究室が出展した。佐藤源之教授の資源環境科学研究分野は、同研究室が進めている地雷探査のための最先端のレーザ技術を披露した。上廣歴史資料科学研究部門では、歴史資料保全活動のパネル展示を行うとともに、古文書の文字を読むコーナーを設置した。中国研究分野の瀬川昌久教授は、フィールド調査の様子を移した写真展示を行い、訪れた市民に写真をプレゼントするコーナーを設けた。石渡明教授の地球化学研究分野では、IODP（統合国際深海掘削計画）との連携による展示と講演会「地部探査船「ちきゅう」が解き明かす東北沖地震の謎」（講師は海洋研究開発機構地球内部ダイナミクス領域の斎藤実篤氏）を開催した。モンゴル・中央アジア研究分野の岡洋樹教授は、毎回恒例となったモンゴルゲル展示を行った。ゲルでは、研究紹介展示とともに、モンゴル民族衣装の展示・試着コーナーや、モンゴル伝統の馬頭琴の演奏が行われた。東北アジア研究センターの展示には、両日併せて前回2011年度を上回る約1,400名の来場があった。また本年度の片平まつりでは特別企画として本センターと災害科学国際研究所による特別記念講演会「水と大気:国を超える環境問題」が開催された。この講演会では東北アジア研究センター明日香壽川教授による「中国の大気汚染問題と日中協力」、災害科学国際研究所の呉修一助教による「地球温暖化で将来の水災害は増加するの?」と題する二つの講演が行われた。本センターが開催したIODPの講演会、特別記念講演会いずれも多数の市民が聴講し、活発な質疑応答がなされていた。

(岡 洋樹)



上廣歴史資料科学研究部門の展示

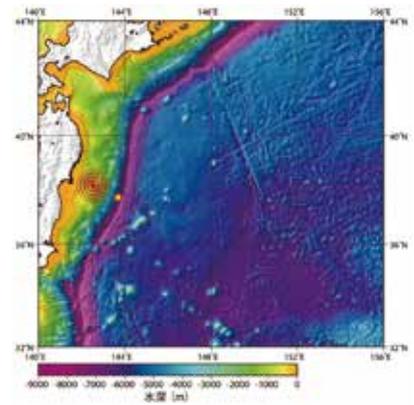
② 東北大学片平まつり2013東北アジア研究センター・IODP共催講演会

地球深部探査船「ちきゅう」が 解き明かす東北沖地震の謎

2011年（平成23年）3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震。この超巨大地震を引き起こしたプレート境界断層は、水深7,000mの日本海溝中に存在する。本講演会では地球深部探査船「ちきゅう」がこの深海の断層を掘り抜いた、まさに最新の科学が紹介された。この航海の乗船研究者でもある海洋研究開発機構の斎藤実篤氏による講演は、まさに現場の臨場感にあふれる内容であった。地震断層を掘り抜くような深海底の掘削は前例がなく、何度もトラブルに見舞われ苦労した過程も紹介された。この際の試行錯誤の結果、ついに超巨大地震の原因であるプレート境界の断層「そのもの」が得られたのだ。このような物質を我々人類が手に入れたのは初めてのことである。その後の掘削孔の観測データは、断層の激しい動きをじつに物語るようであった。講演会では多くの質疑応答も交わされた。この研究成果はある巨大地震の一例にすぎないのか、他の巨大地震の典型例として捉えることができるのか？具体的には南海トラフの危険性を考えたときにどう鑑みるべき成果なのか？さらには防災減災への価値を問う質問もあった。そ

のような質問は当然であるし、この大きな科学的成果をサイエンスの中のあるひとつの「解決」につなげることは分かりやすい。社会はそれを期待するし、そのため

に科学は日々進歩してきたのである。しかしこのようなひとつひとつの成果の積み重ねが長い時間を経て今日の科学の発展に至っていることを広く知らしめ、その過程がサイエンスとして最も重要であることを理解してもらうことこそ必要なのだ。講演会終了後には講演者や断層から得られた岩石のレプリカのもとに、学生から年配の方まで多くの聴衆が集まっていた。こうした内容の講演会を震源に最も近い都市である仙台で開催したことには、非常に大きな意義があったと思う。（平野直人）



東北アジア東方沖、東北地方太平洋沖地震の震源周辺の海底地形。円の中心が震源の位置である震央を示し、そこから広がった震源域の中の星印は掘削された場所を示す。

③ 東北大学片平まつり 2013 特別企画記念講演会

中国の大気汚染 問題と日中協力

2013年10月1日の北京での大気汚染の様子
出典：レコードチャイナ（2013年10月1日）
<http://www.recordchina.co.jp/gallery.php?gid=77488&type=0&p=1&s=no#t>



大気汚染問題における根本的な問題は化石燃料依存というエネルギー・ミックスおよび持続可能でない発展パターンの問題である。いわば世界共通の問題であり、即効薬はない。

中国から日本へのPM2.5の中国からの飛来に関しては、日本の研究機関によると、場所と時期によるものの、日本の年平均PM2.5濃度に対する越境汚染影響は最大で5割程度と推算されている。ただし、北京でPM2.5濃度が高い日が続いた2013年1月における日本の北九州地域のPM2.5濃度を1年前と比較した場合、それほど高いものではなかった。このことは、中国でのPM2.5の濃度上昇と日本のPM2.5の濃度上昇との関係が、少なくとも現在のところは単純なものではないことを意味する。

具体的な日本からの技術移転が期待されているが、技術移転は大部分が民間企業によって行われる。民間企業は、公的資金による支援を常に期待するが、それらの多くが技術移転あるいはビジネスという意味では失敗している。また、日本の公害経験などは、これまでの政府開発援助（ODA）

などによってある程度は中国側に伝わっている（新たなODAも難しい）。さらに、いくつかの分野では、日本よりも中国の方が積極的あるいは先進的な環境エネルギー対策をとっている。したがって、現実的には、日本が提供できる即効的な技術や政策提言は限られている。

このような状況のもと、一般論としてはやはり何らかの具体的な排出削減数値目標のようなものが伴う協力枠組みの構築が理想的ではある。したがって、筆者は、両国トップの指示のもと、まず日中両国で自主的な国内削減目標（例：北京市の排出削減目標）を確認すると同時に、日中共同で環境ファンドを構築し、エネルギー・資源の共同開発・備蓄問題と関連づけて両方の国に経済的なインセンティブを与えることが必要不可欠だと考える。

今の環境危機を逆に利用して、高いレベルの政治経済的な協力関係を構築することがベストなシナリオであり、うまくやれば十分に実現可能だと考える。（明日香壽川）

4 日本地質学会 (東北アジア研究センター共催)の 開催について (9月14~16日)

日本地質学会(私が現会長)の第120年学術大会は、「東北、いま、たちあがる地質学」をキャッチフレーズに、東北大学の4部局(東北アジア研究センター、理学研究科、災害科学国際研究所、学術資源研究公開センター)との共催で2013年9月14~16日に川内北キャンパスで行われ、16日の台風18号の直撃にもかかわらず約1,000人の参加者を得て、一般公開シンポジウム「東日本大震災:あの時、今、これから」、私が世話人のオフィオライト国際シンポジウム、津波堆積物に関するワークショップ、柳田邦男氏を招いた市民講演会「災害に備える安全な社会とは」、12コースの巡検(地質調査旅行、一般向けアウトリーチ巡検「仙台の大地の成り立ちを知る」を含む)、仙台市科学館における地質情報展など関連行事も含め、成功裏に無事終了した。また、ポスターセッションでは、例年のように、「小さな Earth Scientist のつどい:小・中・高校生徒「地学研究」発表会」も開催され、全国の学校地学部の研究発表が行われ、優秀作品が表彰された。一方、会員限定で「原子力規制委員会



日本地質学会仙台大会の国際シンポジウムに招待した(左から)ソコロフ教授(露)、ディレック教授(米)、(石渡、石井)、ハリス教授(米)。右端は中国の楊建軍教授。学会後の北上山地のオフィオライト巡検にて。

の評価会合についての意見交換会」も行われ、全国各地の原発直下の破碎帯の評価に関わる研究者が情報を交換した。オフィオライトに関する国際シンポジウムでは、2011年に当センター客員教授を務めたロシア科学アカデミー地質研究所(モスクワ)のセルゲイ・ソコロフ教授と米国マイアミ大学のイルディリム・ディレック教授、米国ブリガム・ヤング大学のロン・ハリス教授を招待し(図1)、非常に有意義なディスカッションができた。また、この3人の外国人招待者及び中国科学院地質研究所の楊建軍教授は、私を含む3人の案内者による9月17-18日の北上山地オフィオライト巡検に参加し、好天のもと現地で議論した。懇親会でごあいさついただいた岡洋樹センター長、アウトリーチ巡検をご担当いただいた宮本毅助教と蟹澤聰史名誉教授、外国人招待者に関してお世話になった平野直人准教授、徳田由香助教と当センター事務室の皆様にご感謝申し上げる。(石渡 明)

5 日露ワークショップ

日本文化を教える:ロシアと 日本の日本語教育の現場から (9月25日)

このワークショップは、日本語教育をテーマとして、ロシア・ノボシビルスク市で日本語教育に携わる教師と、本学で日本語教育の研究・教育実践に携わる教員、それに仙台市で外国人に対する日本語教育や支援事業を行っている組織の専門家による報告で構成された。本学は、ノボシビルスク郊外のアカデミゴロドグにあるノボシビルスク国立大学と大学間学術交流協定を締結し、さまざまな学術交流を実施してきた。同大学の人文学部東洋学科には日本語のコースがあり、日本語教育が行われているほか、市内にはシベリア日本語教育協会が運営するノボシビルスク市立「シベリア・北海道」文化センターが活動している。東北アジア研究センターでは、2008年以来、ノボシビルスク国立大学人文学部との覚書に基づき、東洋学科との交流を重ねてきた。今回のワークショップは、本学ロシア交流推進室の企画として、ノボシビルスクで日本語教育に携わる教師を招聘し、本学の日本語教育の専門研究者や仙台の日本語教育関係者の交流を目的として開催した



報告するイリーナ・ブーリク氏



同じく才田いづみ教授

ものである。ロシア交流推進室長木島明博教授の挨拶と東北アジア研究センター長岡洋樹教授による趣旨説明の後、第一セッション「ロシアの現場から」では、シベリア日本語教育協会会長ブーリク・イリーナ氏、ノボシビルスク国立大学のフロロワ・エフゲニヤ准教授、同大日本語教師宿利由希子氏(本学大学院文学研究科卒)、本学ロシア代表事務所職員でノボシビルスク大学の卒業生ビワキナ・マリア氏による報告が行われた。続く第二セッション「日本の現場から」では、本学大学院文学研究科の才田いづみ教授、高等教育開発推進センター佐藤勢紀子教授から日本語教育の最先端の技術や、教育実践の紹介がなされ、また財団法人東北多文化アカデミー代表押谷祐子氏から民間の教育実践の紹介、宮城県国際化協会の大泉貴広氏から行政の立場からの日本語教育推進の取り組みが紹介された。本学が蓄積してきた日本語教育の技術は、今後の両大学の交流に大きく貢献することが期待される。

(岡 洋樹)

⑥ 日本研究の国際化を目指す ～ハイデルベルク大学「古文書ワークショップ」～

2012年4月の発足当初より上廣歴史資料科学研究部門では、日本の歴史資料研究を国際的に普及させるという目標を立てています。具体的には、海外で活動をされている日本史・日本文化の研究者や大学院生に江戸時代の古文書（こもんじょ）解読の技術を身につけてもらうというねらいです。その最初の教育プログラムとして、2013年9月16～20日にドイツ・ハイデルベルク大学人文学部日本学科（日本学研究所）で「古文書ワークショップ」を開催いたしました。

「ミミズが違ったような文字」と言われる江戸時代の古文書を勉強したいというニーズは高いものの、ヨーロッパで学ぶ場はなかなかありません。私どもの企画に共鳴くださったドリーン・ミュラー氏（ロンドン大学講師、日本美術史）、ユードット・アロカイ氏（ハイデルベルク大学教授、日本文学史）の多大な協力を得て実現に至りました。今回は14名の方々が受講し、ハイデルベルク大学のほか、ベルリンやハンブルク、ミュンヘンといったドイツ国内の大学院生たち、またイギリスやスイスの若手研究者、アメリカからの出席者もありました。専攻は日本の歴史・文学・美術・宗教・経済など実に多彩で、古文書の解読方法を学び、さらなる



本物の古文書を実際に読む
(2013年9月17日講義風景)

研究の深化を目指すために参加したようです。

期間中は毎日10時から17時まで、江戸時代の瓦版や和歌、記録をテキストに講義を実施しました。そして終了後は各自が取り組んでいる研究テーマに関する個別指導をおこない、朝から晩まで「古文書漬け」の5日間でした。受講者からの「貴重なワークショップで今後も続けて日本の研究に打ち込みたい」という感想を受け、このような取り組みの重要性を改めて認識しました。私自身も海外における日本研究の状況とこれから活躍が期待される研究者たちの熱意を感じ、引き続き国際的な研究交流に力を注ぎたいと思います。(荒武賢一朗)

⑦ 学問を通じた地域連携

「講座：地域の歴史を学ぶ◎鬼首」の開催

2013年10月6日、宮城県大崎市鳴子温泉鬼首の曹洞宗洞雲寺本堂において「講座：地域の歴史を学ぶ◎鬼首（おにこうべ）」を開催しました。この講座は、大崎市の岩出山古文書を読む会と共同でおこなっているものです。タイトルの「地域の歴史を学ぶ」は、地域住民の皆さんと私たち歴史研究者と一緒に「学ぶ」ことで、地域社会と研究者の連携を深めていこうという意味を込めています。

今回は建築史がご専門の永井康雄氏（山形大学地域文化教育学部教授）をお招きし、「大崎地区の歴史的建築」と題したご講演をいただきました。鬼首地区の歴史建築物調査の成果と、民家の保存・活用に関する地域の取り組み方について永井教授が実践されている富山県滑川市の事例を紹介されました。また私は「江戸時代の鬼首を明らかにする」というテーマで、昨年からの岩出山古文書を読む会の皆さんと取り組んでいる鬼首地区の古文書調査・分析の成果を報告しました。講座の休憩時間には、地元の所蔵者が自ら持参くださった江戸時代の鬼首村絵図を実現する機会にも恵まれました。建築物、古文書、絵図が揃ったことで地域史の理解が総合化したように感じます。

当日は予想をはるかに超える116名の参加者があり、鬼首の歴史・文化に対する関心の高さを知ることができました。構想・準備の段階から、地元鬼首の住民有志、岩出山の会員諸氏、そして私ども研究者が協力しながら進めてきましたので、関係者各位の熱意が伝わったように思います。歴史という学問を通じてさまざまな人々が結集し、今まで知ることのなかった多くの事実を共有することは意義深いと感じました。ご多忙のなか貴重な成果を披露してくださった永井先生、運営に尽力された方々、そして出席者の皆様方に厚く御礼を申し上げます。(荒武賢一朗)



江戸時代の鬼首村絵図を実現する参加者の皆さん

表彰

●佐々木聡専門研究員が2013年度日本中国学会賞（哲学・思想部門）を受賞

日本中国学会は中国哲学・文学・語学研究の総合的全国学会で、学会賞は『日本中国学会報』掲載論文を主な対象とし、40歳以下の研究者2名程度に毎年授与されます。今回、受賞対象となった『「開元占経」の諸抄本と近世以降の伝来について』（2012年・第64集掲載）は、唐代に編纂された天文暦学・占術の集大成である『開元占経』の伝本について、国内外の多くの機関にて実地調査を行い、テキスト系統を整理し、最も素性の確かなテキスト系統を明らかにした点、また元・明以降の本書の流传状況に一つの指針を示した点などが評価されての受賞となりました。10月12日、秋田大学にて授賞式が行われました。



川合康三理事長より賞状を授与される佐々木専門研究員
(佐々木聡)



BOOKS 著書紹介

センター関連出版物

東北アジア研究専書第4号

『「創られた伝統」と生きる
一地方社会のアイデンティ
ティー』

金賢貞著（青弓社）2013年9月



本書は、一般に「石岡のおまつり」として知られる、茨城県石岡市の「常陸國總社宮大祭」の歴史的構築のプロセスと、それに関わる人々の社会的実践と認識の諸相に分析の中心軸を置きつつ、そこに見え隠れする「過去」への関心や「伝統」の主張という歴史再帰的实践を、石岡という地方社会の歴史的コンテキストのなかで明らかにし、現代日本における地方社会のアイデンティティーを実証的に論じた研究成果である。特に、いわゆる「伝統文化」に対する本質主義的観点のアンチテーゼとして適用される構築主義的観点の有効性や重要性は認めつつも、現地の人たちとの密接な関わり合いのなかで進められる現場性の高い研究であるが故に、構築主義的アプローチによって生じる問題の重大性を指摘し、その克服を試みた点、さらに、現場中心の民族誌的研究に欠けやすい歴史的記述を重視した点に特色がある。構成は、序章と終章を入れて全7章である。（金 賢貞）

ド調査、社会学的参与観察、土木計画的考察、ミクロ経済学分析などの多様な視点から「地域をまるごと理解する」という文理連携アプローチの可能性も感じていただけたと思う。まえがき・あとがきには、東北アジア研究センターにお世話になった6年間を振り返り、交通の途絶問題に傾注して今回の共著者と出会った経緯、東北アジア地域研究における文理連携の必要性和災害研究への今後の展開についても、書かせていただいた。センターからの「卒業文集」をこのような形で世に問うことができ、大変幸せに感じている。（奥村 誠）

センター報告9号

『東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査2012年度報告集』

高倉浩樹・滝澤克彦編（2013年9月）



本書は、2011年度に引き続き宮城県からの受託事業としてセンターが実施した「東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査」の報告集である。調査は、県内23地区において、補助調査者を含めた30人の調査者により、延べ84日にわたって、話者120人（延べ145人）に対し、行われた。本書では、それに祭礼行事の観察記録を加えた85の報告がまとめられている。また、2012年度に実施した調査地域の神社祭礼に関する質問紙調査の結果も収録した。

震災から1年以上が経ち復興へ向けた様々な動きが出てくるなかで、「被災地」の現実もより多様化してきている。民俗芸能や神社祭礼も、地域によって復興へ向けた多様な展開が見られる一方、まったく再開の兆しが見られないところもある。そのような多様性を捉えるために、行政やボランティアの関わり、移転による地域社会の再編や経済復興の行方など、民俗文化財を取り巻く様々な要因に注目する必要性が出てきている。本報告集では、そのような被災地域の多様性が、民俗文化の担い手たる話者の言葉を通して描き出されている。（滝澤克彦）

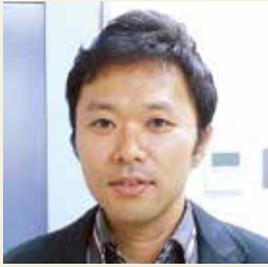
東北アジア学術読本3

『途絶する交通、孤立する地域』

奥村誠・藤原潤子・植田今日子・神谷大介著
（東北大学出版会）2013年10月



この本は、2011年12月の東北アジア研究センター公開講演会「途絶する交通、孤立する地域」における3つの報告と、当日のコメンテーターによる論考をまとめたもので、ソ連崩壊と気候変動に揺れるシベリアの北極圏の村、台風や波浪の影響を受けやすい沖縄県の離島、東日本大震災時の仙台を舞台に、交通の途絶と孤立に対して人や社会はどのように備え、どう反応したのかを紹介、考察しており、気軽に楽しく読める内容となっている。人類学的フィール



●助教
友田 昌宏

10月1日付で東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門に助教として着任いたしました。友田昌宏と申します。私の専門は幕末・明治期の政治史で、当該期に活躍した米沢藩出身の政治家宮島誠一郎を対象として研究を続けてまいりました。藩の周旋方を務めただけあって宮島はまさに記録魔であり、彼の遺した史料は数千点にのぼります。戊辰戦争における米沢藩の動向をテーマに卒論を書いていた大学時代、私は宮島文書と出会い、やがて宮島にのめりこんでいきました。このたび東北大学に

採用していただきましたのも、東北出身の宮島の導きによるものとひそかに思っております。私は史料によって研究者として育てられてきました。その史料の保全・調査に仕事として携われることは私にとって幸運なことです。また、古文書講座・歴史講座では、これまで博物館学芸員として日常的に市民と接していた経験を活かし、史料のなかに広がる豊かな東北の歴史を受講される方々とともに考えていきたいと思っております。未熟者ですが、どうかよろしくお願ひ申し上げます。



●客員研究員
カジ・エ・カレポマ

カジ エ カレポマ先生は本学大学院情報科学研究科で博士前期および後期課程を修了し、博士(情報科学)を取得しています。現在は American International University-Bangladesh の准教授です。2013年8月1日から客員研究員として衛星画像の可視化処理の研究のために工藤研究室に滞在します。これまでの主な業績としては、異なる解像度の衛星画像を融合して高解像度カラー画像を作成する画像融合処理方法の分野で世界のトップレベルの学術論文誌

に採択されております。

カジ先生は、現在進行中の森林火災から発生する二酸化炭素削減研究ユニットで立ち上げ時に教育研究支援者として衛星データ解析に重要な成果を上げ、その後帰国しました。本研究ユニットは今年度が最終年度のため、その取り纏めに来日したものです。さらに、滞在中は衛星画像を利用して大気汚染や黄砂の状況をリアルタイムで可視化する方法に融合処理を取り入れた新しい可視化表示方法の開発にも着手します。

(工藤純一)



●客員研究員
ユ・チュアン
(于权)

10月28日から、内蒙古民族大学のユ・チュアン(于权)教授が本センターで研究活動を始められた。先生は、中国内モンゴルのモンゴル族の出身の46歳で、中国のモンゴル学の中堅研究者として活躍している。専門は13・14世紀の中世モンゴル語の研究で、2008年に『元朝秘史』におけるモンゴル語の文の構造の研究をテーマとして内蒙古大学で博士の学位を取得した後、中世モンゴル語の語法に関して多くの学術論文を発表しているほ

か、2011年には『現代モンゴル語のシンタクス研究』(内蒙古大学出版社)を共著で出版された。ユ・チュアン先生は、中国政府派遣研究員として1年間の予定で来日され、センターでは客員研究員として「中世モンゴル語の研究」を行い、日本におけるモンゴル学、モンゴル文献学の研究状況を調査されるとともに、センターのプロジェクト研究「東北アジア言語文化遺産研究ユニット」の活動に参加する。

(栗林 均)



●教育研究支援者
麻田 雅文

2013年10月1日より、20世紀ロシア・中国史再考研究ユニットの教育研究支援者として着任いたしました。これまで東北大学へは一度、研究会で訪れる機会があったばかりでしたが、このようなご縁に恵まれて着任できたのを嬉しく存じます。

研究対象は20世紀前半の中露関係です。従来は中でも中東鉄道という、シベリア鉄道の短絡線の経営を研究対象としてきました。幸いこちらの成果は、拙著『中東鉄道経営史—ロシアと「満洲」1896-1935—』(名古屋大学出版会、2012年)

にまとめる機会に恵まれました。現在は主にソ連、とりわけスターリンをはじめとする党中枢の幹部たちの、1920年代から50年代にかけての「満蒙政策」を、新出史料に基づいて検討しています。

ロシア帝国やソ連側の史料収集のため、サンクトペテルブルグやモスクワの文書館をフィールドとしてきました。近年はワシントンDCやロンドンにも足を伸ばし、20世紀の中国東北に関連する史料を収集しています。どうぞ宜しくお願いいたします。

活動
風景

地中レーダによる震災復興のための遺跡調査

東北アジア研究センター助教 高橋一徳

資源環境科学研究分野では、電波を用いて地下の構造や地中埋設物の位置を知ることができる地中レーダと呼ばれる技術を研究しています。これまで、地下水など資源の調査や地雷の検知といった様々な用途への応用を行ってきましたが、最近「減災をめざした電波科学研究ユニット」を立ち上げ、震災復興のために地中レーダを用いた遺跡調査を行っています。

東日本大震災では、東北地方の沿岸部で津波による甚大な被害を受けました。震災から2年が経過してもなお、復興にほど遠い状況である地域がたくさん見受けられます。これら沿岸部の津波被災地では、住宅地・ほ場の整備工事や堤防の復旧および強化工事が数多く計画されています。さらに、これまで沿岸部にあった住宅地の高台移転のための宅地造成事業も多く計画されています。これらの開発・工事では、予定地に遺跡があることが予想された場合、その調査を事前に行うことが多くの自治体において条例で定められています。東北地方では、縄文時代以前からの遺跡が広範囲で分布していることから、多数の震災復旧工事箇所でも事前の遺跡調査が予定されています。しかし、発掘（開削）を伴う遺跡調査では膨大な時間を要する恐れがあり、住民が望む早期復旧とは裏腹に、事業の遅れが懸念されています。

そこで、非開削で地下の様子を探ることができる地中レーダを用いることで以下のような利点があると考えられます。

- ・ 非開削で遺跡の有無を判断することができる。また、遺跡が発見された場合、遺跡の存在する位置および範囲を非開削で特定することができる。
- ・ 発掘を行う場合に、地下にどのような遺構があるかについての情報を得ることができるため、発掘自体による遺跡の損傷を防ぐことができる。
- ・ 史跡など、発掘そのものが制限される場所において、発掘を行わなくとも以降の状態を把握することができる。



宮城県東松島市野蒜地区における地中レーダ計測風景

このように地中レーダの利点を実際の遺跡調査現場で実証し、震災復興に寄与するため、昨年度より宮城県東松島

市および山元町、福島県南相馬市において津波被災地の遺跡で調査を行っています。

宮城県東松島市には野蒜築港という明治初期に計画された広大な近代港湾の建設跡があり、下水道跡が発見されています。その一部が震災復興に係わる堤防復旧強化工事の予定地に含まれており、未発見の下水道跡を地中レーダにより探ることが目的です。これまで5,000平米以上の計測を行い、地下の反応があった場所を東松島市教育委員会に報告しています。

宮城県山元町では、住宅地の高台移転に伴う宅地造成の計画が進んでいます。しかし、その予定地は古墳群および製鉄かまどがあることで知られており、開発前に遺跡調査が必要とされています。そこで、一部の古墳の墳頂および墳裾における地中レーダ調査を実施し、埋設物有無の確認および古墳の本来の形状の推定を試みました。

福島県南相馬市では、津波により被害を受けたほ場および道路の整備、および防災集団移転による住宅地の造成が計画されています。南相馬市周辺には以前から多数の縄文から平安時代にかけての集落跡が確認されており、非常に多くの遺跡調査が必要とされています。そこで、開削を伴う試掘および本調査に先立って地中レーダによる探査を行い、どのような遺跡がどのように分布しているのかを開削前に知ること、効率的な調査の計画が可能となることを期待し、いくつかの現場で地中レーダ探査を行いました。南相馬市では2013年9月に調査を開始してから約2ヶ月にわたり地中レーダ計測を継続して、これまで約10,000平米の調査を行っています。

私たちは、このように震災以前に行われてきた地中レーダによる学術的な遺跡調査とは性質も規模も大きく異なる遺跡調査に取り組んでいます。このような遺跡調査に必要な地中レーダデータの解析や解釈の方法は以前のものとはやはり異なっているため、試行錯誤を繰り返しています。また、遺跡調査全体の中で地中レーダ計測をどのように位置づけ、そのデータをどのように活用すれば、より効率的な遺跡調査に寄与できるのかということも、現地遺跡調査関係者とともに検討しています。



福島県南相馬市における地中レーダ計測風景

編集
後記

今年最後のニュースレターをお届けします。新任の方々を迎え、また皆様が大変なご活躍だったこともあり、掲載スペースの確保に苦心するほどの充実の内容になりました。じっくりご味読ください。年男としての1年も早足で過ぎ去ろうとしています。身の回りのことでは引越し作業と、初めて経験した片平まつりが印象に残りました。これから一段と寒さが増してきますので、お体に気をつけて、皆様良いお年をお迎えください。(高橋陽一)

東北大学 東北アジア研究センター ニュースレター 第59号 2013年12月24日発行

発行 東北大学東北アジア研究センター 編集 東北アジア研究センター広報情報委員会
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41 番地 東北大学東北アジア研究センター
PHONE 022-795-6009 FAX 022-795-6010 <http://www.cneas.tohoku.ac.jp/>

